

地域活性化という「遊び」

60

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

移 住した当初の福知山は
まだ移住促進などの取り組み
が活発ではなく

一家5人が
限界集落に移住というのは
ニュースとして地元の新聞に大きく
とりあげられました。
そうなるかと雑誌やテレビと
さらに取材は増えます。
そんななか一番多かった質問は

やはり移住に至った
経緯や理由ですが

きかれると子育てのことに始まり
つねに伝えたいことをいっぱい抱え
て生きている僕としては

自然のこと農業のこと
はては聞かれてもない芸術論まで
つつい時間忘れて熱くかたつて
しまうので

取材にこられた記者さん
僕の想いを理解しつつも
最後は決まって心配そうに
「奥さんは移住に賛成されています
か？」という質問が出ます。

と
てその奥さん
生まれは京都の八瀬。
古い風習やしきたりが大切に守られ

**奥さんは田舎暮らしの大先輩
ご近所さんをちよっと気遣いながら**

ているのは
ある意味いま暮らしす限界集落以上。
地元の神社には

毎年奉納する踊りが複数あり
小学校6年生の担当する踊りは

そのために髪を結いますが
結構な長さが必要なため
女の子は小学校入学から6年生まで
髪を切ることが

許されなかったそうです。
そんなところで育ったわけですから
彼女は田舎暮らしの大先輩。
20代には数年間

90歳のおばあちゃんの
自宅介護も経験し
田舎の良いところ悪いところ身にしみる
ほどにわかっておられます。

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

移住者よそ者外国人を通り越して
宇宙人と称されるほど

自分の思う通りにどんどん進む僕と
は正反対。
田舎で暮らすということにおいて
最低限押さえておかないといけない
ポイントや

お年寄りが喜ぶようなポイントと
きちん理解しつつ
ゆつくり楽しみなながらそれを日々積
み重ねているだけあって

集落のお年寄りからは
絶大な人気があります。
僕が自由にやりつつも
集落の方々に迷惑をかけたたり
常識知らずの嫌われ者にならずに済
んだのは

彼女の存在があったからにちがいない
りません。
家族で遠出したとき

美味しいものを見つけると
あのおばあちゃん



このおばあちゃんとは大の仲良し。
「朝市や農協まで連れてって」と
気軽に電話がかかってくる。



長年愛用している割烹着。



小学校のPTAでは読み聞かせやコントを企画、人気を博しました。



華道をやっていたので、カフェで花を生けるのは彼女の仕事。

こんな味が好きやから
おみやげに買ってかえろうかと
言い出すのも決まって彼女。
特に親しい友達というのではないけ
れど
彼女のように「ご近所さん」をちょ
っと気にかけて暮らすということでは
人間関係を円満に保つというのは
僕らが過ごした昭和の時代には普通
にあったような気がします。

ご近所さんで必ず思い出すのが
彼女との結婚式での出来事。
20年前とはいえ結婚式も大昔に比べ
て合理化されており
レンタルの婚礼衣装は
式場でパパッと着替えるものと思っ
ていたのですが

前述の通り彼女の場合
まだまだ風習やしきたりの残る田舎
ですから
婚礼衣装がレンタルでも
着付けは実家。
花嫁というものは婚礼の日に晴れ着
を着て家から出るのが当たり前。
しかし困ったことに
彼女の実家はその集落のなかでも
道路からとても急な坂をあがった一
番高台にあり
そしてその道が古い石垣に囲まれた
田舎特有の細い道。
地元の人とはなんとか軽自動車くらい
通すのですが
お迎えの中型のタクシーは無理。
必然的に花嫁はウェディングドレス
を着たまま
200mもその細い坂道を歩くこと
になったのですが



田舎ですが結婚式はドレスでした。ご近所さんが「一緒に写真撮ってー」とたくさんやってきたそうです。

それを聞いた「ご近所さん」
朝から総出で
道の落ち葉やゴミをいつも以上に
きれいに掃き清めてくれ
出発の時間にはまた
「ご近所さん」総出で盛大に見送っ
てくれたそうです。
当時の僕は芸術家。
京都市内でほとんどというくらい
近所付き合いのない気儘な都会の一
人暮らし。
誰にも見送られることなく
一人バイクにまたがって
寂しく家を出たのですが
あまりに対照的ですね。

おじいちゃん、おばあちゃんの
いる大家族で
そんな優しい「ご近所さん」と一緒
に子供時代を過ごした彼女。
時にはちよつと考え方が古いと思
うこともありますが
彼女の限界集落での「ご近所さん」
に対するちよつとした気配りには
核家族で街に育った僕が
学べなかった
なんかこう理屈では語れない
優しさやぬくもりのようなものを感
じます。
コロナ禍で人間が互いを監視する
ような風潮のなか
そんな優しさやぬくもりを失わない
よう大切にしていきたいですね。